

# 偕行現代考

## 『偕行記事』を

復活しては？

喜田 邦彦 陸自66

陸上自衛隊幹部学校が編集していた『陸戦研究』が、本年3月をもって休刊になった。理由は、陸自の改革・改編に伴い、幹部学校と研究本部が統合され、教育学校機能が大幅に削減したことに因る。

『陸戦研究』は、二つの役割を担っていた。一つは、CGS受験者向けで、若手幹部の戦術能力の向上を期待した。もう一つは、陸戦・戦略・作戦の研究を発展させるため、研究者に発表の場を提供してきた。そうした役割はこれからどうなるのだろう。

『陸戦研究』は昭和55年から平成30年まで発刊された。前身は『幹部学校記事』であり、昭和28年～昭和54年まで刊行した。陸自幹部OBにとって、若き頃の戦術・戦略の研鑽に欠かせなかつた。特に、僻地の勤務者にとって、陸自全体の動きや、外国の軍事技術の動向を知るうえで、刺激的であり励みになっていった。

ところで今、海・空自が関わる研究・親睦・応援等の役割を持つ冊子は、どうなっているのか。海自関係では、よく知られる『水交』が年4回刊行し、

最新号では「海上自衛隊を支える桜」のシンボルマークを制定し、広報に努めている。空自関係では、幹部学校が『鵬友』を年4回発刊して空戦研究誌の役割を果たしている。その他に航空自衛隊連合幹部会が親睦・総合の性格を持つ『翼』を発刊し、販売している。陸自関係では、現職幹部自衛官を会員とする『修親』が家族をも対象とした親睦的役割を果たしている。

さてそこで『偕行』だが、戦前の陸軍は『偕行記事』を刊行してきた。目的は、時代や戦争により変化しているが、将校団の親睦とともに、「兵学の研究」「外国の陸軍情勢」「秘に関わらない陸軍の動き」「戦争の教訓」「近代戦の傾向」等を掲載し、現役将校だけでなく予備役将校にとって「必読の書」だったとされる。

昨今の情勢変化を踏まえ、現代の『偕行』を若い陸戦研究者の論文発表の場として提供してはどうだろう。現在の『偕行』投稿者は、原則として会員に限っているが、会員の推薦による現職自衛官に発表の場を提供することは、意義あると考える。

偕行社の会員も高齢化が進み、汗の匂い、エンジンの匂い、硝煙の匂いのする論考が減ってきた。PKOや能力構築等の新しい任務を理解し、陸自応援団としての役割を明確にする第一歩と考えたいのだが……。会員からのご意見をお待ちします。